

サークル集団への態度に関する研究

指導教員名： 西村 孝史

氏名 : 藤田 ゆい

頁数 : 20 頁

サークル集団への態度に関する研究

藤田 ゆい

要約

サークル集団に対する態度の研究は、多く行われてきたが、サークル集団に対する否定的態度を含めた態度に関する研究はあまり行われてこなかった。本研究では、肯定的態度も否定的態度も含むサークル集団への態度に注目する。サークル集団への態度が集団にどのような影響を及ぼすかを、成員の自発的行動である組織市民行動で、大学生活への影響として大学生活への満足度を使用し検討した。また、サークル集団の特性によって態度が変化するかを明らかにするために、組織風土を用いた。その結果、肯定的態度は組織市民行動の下位概念である市民としての美德に正の影響、否定的態度はスポーツマンシップに正の影響、誠実性に負の影響を与え、肯定的態度の集団への責務が、大学生活への満足度に正の影響を与えることが判明した。また組織風土の管理性、開放性はともに肯定的態度の規定要因であることが明らかにされた。

キーワード：サークル集団への態度 組織市民行動 組織風土

目次

- I. 問題意識
- II. 既存研究
 1. サークル集団への態度
 2. 組織市民行動
 3. 組織風土
- III. 仮説の導出
 1. サークル集団への態度から組織市民行動、大学生活への満足度に与える影響
 2. 組織風土からサークル集団への態度に与える影響
- IV. 調査方法
 1. 概要
 2. 使用項目
- V. 分析
 1. 相関分析
 2. サークル集団への態度が組織市民行動、大学生活への満足度に与える影響
 3. 組織風土がサークル集団への態度に与える影響
 4. 追加分析
- VI. 考察
 1. サークル集団への態度が組織市民行動に与える影響
 2. サークル集団への態度が大学生活への満足度に与える影響

3. 組織風土がサークル集団への態度に与える影響
 4. 媒介分析
 5. 天井効果・床効果について
- VII. インプリケーション
1. 学術的インプリケーション
 2. 実務的インプリケーション
- VIII. 研究の限界と今後の課題
- IX. 参考文献

I. 問題意識

大学生の 8 割がサークル集団への所属経験を有している（全国大学生生活協同組合, 2012）。大学生がサークル集団に所属することは、対人関係能力や社会性の獲得にとって重要であるだけでなく、大学生の日常生活において心理的支えとなる安定化の役割を果たしている（新井・松井, 2003）。しかし、2003 年以降の研究においては、サークル集団に積極的に関わるのが重要であると指摘されている。例えば、高木（2006, 2007）では、大学生が部活やサークルに所属し、注力することで充実感が得られると指摘している。樋口（2007）も、サークル集団の活動に満足している学生は、大学生活に適応しやすいと明らかにした。このように大学生がサークル集団との関係を良好にし、能動的に関わるのが大切であると言われている。しかし、サークル集団に関する研究において、集団への態度に関する研究が少ないことが指摘されている（橋本他, 2010）。大学生によってサークル集団との関わり方は様々であり、能動的に関わる大学生もいれば、受動的に関わる大学生もいる。実際の経験からも、私自身の所属するサークル集団にも両方の学生が存在すると感じる。サークル集団への態度に関する研究を行った高田・松井（2017）では、サークル集団への態度は肯定的態度と否定的態度で構成されるとしている。

本研究では、高田・松井（2017）と同様に、サークル集団への態度は、肯定的態度、否定的態度両方を含むとし、それが集団にどのような影響を及ぼすのかについて、検討していきたい。なお、本研究では新井・松井（2003）と同様に、クラブ、部活、サークル、同好会などを区別せずにサークル集団という語を使用する。

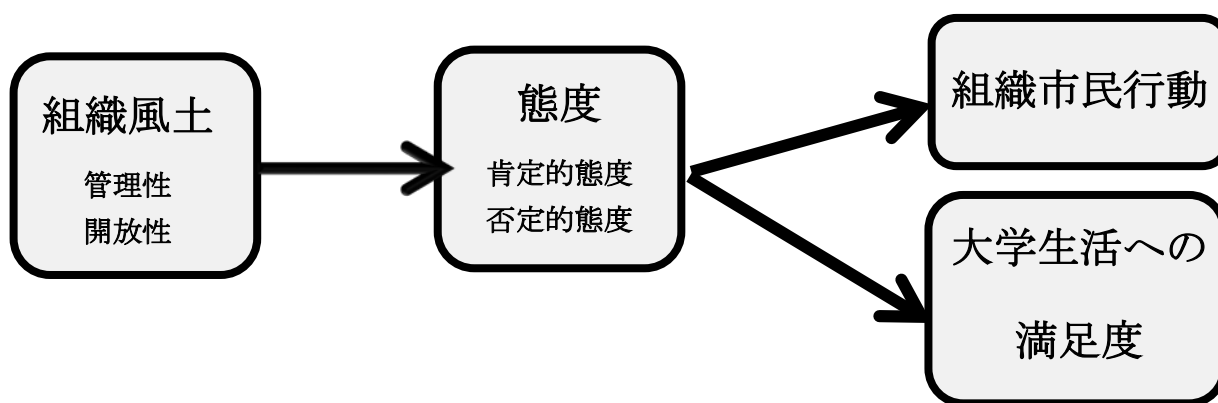
本研究では、サークル集団への態度が集団にどのような影響を与えるかについては、組織市民行動という概念を用いる。組織市民行動とは、組織の効果的機能を促進する役割に規定されていない行動である。サークル集団に所属している個人にとってサークルは、活動維持のための部費や維持費などの費用はかかっても、基本的にはアルバイトや雇用契約と違い報酬が発生しない点で金銭的なインセンティブが生じない。そうした中で役割以上の行動をサークル集団で行うか否かを組織市民行動によって測定することで、集団への影響を検討することができる。さらに大学生がサークル集団に満足し、積極的に関わることは、大学生活を満足させる（高木, 2007）。このことが否定的態度を含むサークル集団への態度によって、どのように変化するのかについても検討していく。

またサークル集団の態度の規定要因については、組織風土に注目する。組織風土とは、サークル集団の雰囲気を表す概念である。実際の経験として、サークル集団によって雰囲気は異なっていると感じ、雰囲気の違いによって、そのサークル集団への態度も異なってくるのではないかと考える。また、高田（2014）では、性別、想起集団や学年などの個人属性、役職や集団フォーマル性などのサー

クル集団の性質との相関を見ているものの、サークル集団が持つ雰囲気との関連を見ていない。このことから組織風土に着目する。

本研究では、上記をまとめたモデルが図表 1 である。まず、サークル集団への態度から組織市民行動、大学生活への満足度の影響を明らかにし、次に組織風土からサークル集団への態度の影響を検討する。

図表 1 サークル集団への態度から組織市民行動、大学生活への満足度における研究枠組み



II. 既存研究

1. サークル集団への態度

すべての学生がサークル集団と肯定的かつ能動的に関わるわけではなく、大学生のサークル集団との関わりは様々である（迫・荒井, 2003）。その点に着目し、高田（2014）は、肯定的態度・否定的態度を含む包括的なサークル集団への態度を研究し、尺度開発に取り組んだ。その集団態度尺度には3つの問題が挙げられている。一つ目は、尺度の項目数が多い点である。二つ目は、2つの尺度で構成されていることである。三つ目は、否定的態度に集団への対立的態度が含まれていない点である。これらの問題点を踏まえ、高田・松井（2017）によって、集団態度尺度が精査され、「集団への反抗」を新たに加えた改訂版集団態度尺度が開発され、妥当性が示された。今回はこの改訂版集団態度尺度を使用する。

高田・松井（2017）における改訂版集団態度尺度には、サークル集団への態度は肯定的態度と否定的態度が含まれる。肯定的態度とは、組織と自身の価値や方針が一致している場面において集団に対して抱く態度である。また、否定的態度とは、組織と自身の価値が一致しておらず、組織に不満を有する場面において生じる態度としている。肯定的態度には、サークル集団への情緒的愛着を表す「集団への親近」、サークル集団に率先して働きかけ、サークル集団をより発展させようとする「集団への責務」、集団が変化することを期待して我慢する「集団への妥協」が含まれ、否定的態度には集団から離れようとする「集団からの離脱」、集団の流れに合わせて集団を傍観し、集団への関心が薄い「集団での日和見」、サークル集団に対して否定的な態度であり、サークル集団に対して愛着が薄い「集団への反抗」が含まれる。

肯定的態度の「集団への責務」や「集団への親近」は、サークル集団に所属し続けている学生がとりやすい態度である。「集団への責務」は、集団の問題を自身の問題と捉える集団同一視コミット

メントとの間に正の相関、「集団への親近」は情緒的コミットメントとの間に正の相関が見られた。「集団への妥協」は、情緒的コミットメントとの間に正の相関があった。否定的態度である「集団からの離脱」や「集団での日和見」は、サークル集団を退団している学生がとりやすい態度であった。「集団からの離脱」は、退職意図と類似している態度で、情緒的コミットメントと負の相関、「集団での日和見」は、集団同一視コミットメントと弱い負の相関、「集団への反抗」は、情緒的コミットメントとの間に負の相関が見られた。

2. 組織市民行動

Organ (1988) において、組織市民行動とは「従業員が行う任意の行動のうち、彼らにとって正式な職務の必用条件ではない行動で、それによって組織の効果的機能を促進する行動。しかもその行動は強制的に任されたものではなく、正式な給与体系によって保証されるものでもない」と定義されている。ここでの任意の行動とは、公的に決められた役割や職務として遂行すべき要件ではない行動のことを指す。

西田 (1997) では、組織市民行動は、「誠実性」「丁重」「市民としての美德」「スポーツマンシップ」「利他主義」の 5 因子で構成されている。「誠実性」とは、「出勤、規則への服従、休憩をとるといった点で、組織に関する最小限の役割要件をはるかに超えた従業員による任意の行動」である。

「丁重」とは、「問題が発生するのを前もって防ごうとする行動」と定義されている。「市民としての美德」とは、「会社の生活に責任をもって参加あるいは関与しているか、それを気にかけている人が行う行動」である。「スポーツマンシップ」とは、「従業員が理想的な環境でないことに不満を言うことなく我慢することを厭わない—すなわち、不満を言わない、ささいな苦情を口にしない、無礼に対する不平を言わない、そしてつまらないことを裁判沙汰にしない—こと」と定義されている。「利他主義」とは、「ある特定の人に向けられる自主的な行動」である。

日本における組織市民行動は、「そのような行動に従事することが正しい」という個人の信念から導かれるのではなく、「そのような行動に従事することが何らかの形で自分自身の利益につながる」と感じているために行われる (西田, 1997) とされている。潮村・松岡 (2005) では、大学生のサークルにおける組織市民行動について述べられており、行動自体の魅力に動機づけられていない人ほど、組織市民行動が多く行われることが示された。また、組織市民行動は、所属集団をどう評価しているかということと直接的に強く関連しており、自分が所属しているサークルを高く評価している人は、組織市民行動を直接的に多く行っているということが示された。内因的な過程動機（その行動自体によってもたらされる楽しさや面白さが動機づけの要因になるもの）は組織市民行動に負の影響を、内的自己概念動機（自分が設定した内的基準をもとに、自分をより高いレベルに向上させたいと願う動機）は組織市民行動に正の影響を与えることが明らかにされている。

3. 組織風土

組織風土は研究者によって解釈が異なるが、主に「組織を取り囲む客観的諸条件の総体として取り扱う」立場と、「必ずしも客観的にとらえることはできないし明文化されたものではないが、成員が心理的に体験しているその組織体独自の雰囲気として取り扱う」立場に分けることができる (梅澤, 1988)。本研究では、集団の雰囲気としての組織風土とサークル集団への態度の関連を検討するため後者の概念を用いる。

新井（2004）において、サークル集団独自の特徴的性質として、フォーマル集団とインフォーマル集団双方の性質を併せ持った集団であることを挙げている。広田（1963）によると、フォーマル集団とは、特定の慣習的システムを持ち、それに従い成員の行動が規制されている集団で、対して、インフォーマル集団とは、個人目的に基づき、成員相互の心理的関係を通して成立する集団と定義される。サークル集団は、趣味やスポーツを行うための集団であり、個人的な目的に基づいて活動しており、またその行動が比較的自由な集団であることから、インフォーマル集団としての属性を持つ。同時に、組織の運営のために役割や規則が設けられ、それによって行動が制限されている集団でもあるため、フォーマル集団としての側面も持っている。このことから、サークル集団の組織風土は、規則によって制限されている面を持ちつつ、行動が個人によって自由である特徴も持つと捉えられる。

尾関・吉田（2007）では、集団が規範に基づいて管理のなされている程度を示す管理性と、集団内で学年に関係なく自由に意見を表明しやすい程度である開放性の2つの概念で成り立っていると捉えている。本研究においても、サークル集団がインフォーマル集団とフォーマル集団の特徴を併せ持っているという性質から、組織風土を管理性と開放性の2つの概念で捉える。

Ⅲ. 仮説の導出

本稿では、最初に、サークル集団への態度が組織市民行動や大学生活の満足度に与える影響について検討する。次に、組織風土からサークル集団への態度の影響を検討する。

1. サークル集団への態度から組織市民行動、大学生活への満足度に与える影響

組織市民行動とは、任意の行動であるため自発的な行動である。集団への妥協と集団への日和見は、ともに組織に対して自ら動くのではなく、他人本位の態度である。よって、以下の仮説を導出する。

【仮説 1-1：集団への妥協は、組織市民行動に負の影響を与える】

【仮説 1-2：集団での日和見は、組織市民行動に負の影響を与える】

先にも述べたが、高木（2006, 2007）や樋口（2007）において、サークル集団に積極的に関わっている大学生は、充実感や大学生活に対する満足度が高いと明らかにされている。サークル集団への態度のうち、集団への責務はサークル集団に対して積極的に働きかける態度である。また集団への妥協は、肯定的態度の下位概念であり、情緒的コミットメントと正の相関が見られている。このことは、集団に対して愛着を持っている態度であると考えられるため、以下の仮説を導出する。

【仮説 2-1：集団への責務は、大学生活に対する満足度に正の影響を与える】

【仮説 2-2：集団への妥協は、大学生活に対する満足度に正の影響を与える】

2. 組織風土からサークル集団への態度に与える影響

管理性と開放性の両方が高い集団は、集団内の規範に沿って系統だった集団の管理運営がなされており、集団内の成員は自分の立場や学年に関係なく、自由に意見を表明できる集団である。また

管理性と開放性の両方が低い集団は、集団の管理が合理的になされておらず、成員同士の自由な意見のやり取りがあまりなされていない集団である。尾関・吉田（2007）によると、管理性の高い集団では、集団活動に影響を及ぼす迷惑行為の生起頻度が低いことが示されている。このことから管理性が高い集団では、集団活動に否定的な態度を持つ人は少ないと考えられる。また、開放性が低い集団は、自由に意見できない集団である。

ここでは“自分の意見が言いづらい”という質問項目が含まれている集団への妥協という変数を用いて、以下の仮説を導出する。

【仮説 3：管理性が高く、開放性が低い集団は、集団への妥協が高くなる】

IV. 調査方法

1. 概要

本稿では、上記の仮説を検証するため、サークル集団に所属している、所属していないに関わらず、大学生・大学院生を対象に Google form を使用し、WEB アンケート調査を行った。回答期間は 10 月 23 日から 11 月 7 日までの約 2 週間とした。WEB アンケートによる回答が 136 名で、そのうちサークル集団に所属したことがない 3 名を除外し、残りの 133 名を以降の研究で用いた。回答者属性は図表 2 に示す。

図表 2 回答者属性

	人数	割合
公式	82	15.8%
非公式	30	61.7%
わからない	21	22.6%
総計	133	100.0%

	人数	割合
運動系	97	72.9%
企画イベント系	14	10.5%
文化系	22	16.5%
総計	133	100.0%

性別	人数	割合
サークル	106	79.7%
部活動	18	13.5%
同好会	4	3.0%
委員会	3	2.3%
就活支援団体	1	0.8%
公式の学生団体	1	0.8%
総計	133	100.0%

2. 使用項目

(1) サークル集団への態度

高田・松井（2017）の改訂版サークル集団態度尺度 30 問のうち、因子負荷量が 0.400 以下のものを除いた 28 問を使用した。これらの項目について、「当てはまらない」～「当てはまる」の 5 点

尺度で回答を求めた。

天井効果・床効果が確認された項目を除外し、残った 13 項目で因子負荷量が 0.400 以下の項目が検出されなくなるまで因子分析を行った結果、5 項目からなる因子 1 と 4 項目からなる因子 2 と 2 項目からなる因子 3 が抽出された。3 つの因子は高田・松井 (2017) と同様の分かれ方であった。従って、本研究では、高田・松井 (2017) と同じく、因子 1 からそれぞれ「集団への責務」「集団への日和見」「集団への妥協」とした。信頼性分析によるクロンバックの α 係数は、集団への責務は 0.812、集団への日和見が 0.811、集団への妥協が 0.864 であった。

(2) 組織市民行動

西田 (1997) の組織市民行動尺度 24 問の中で、そのほかの因子においても因子負荷量が 0.400 以上の項目を除いた 21 問をサークル集団用に修正したものに、“活動中に不用意にスマートフォンや携帯をいじっていない”という項目を追加し、計 22 問を使用した。上記項目について、「当てはまらない」～「当てはまる」の 5 点尺度で回答を求めた。

天井効果・床効果が確認された項目を除外し、残った 20 項目で因子負荷量が 0.400 以下の項目が検出されなくなるまで因子分析を行った結果、6 項目からなる因子 1 と、5 項目からなる因子 2 と、4 項目からなる因子 3 が抽出された。尺度で使用した西田 (1997) では、5 因子に分かれていたが、本研究では 3 つの因子になった。因子 1 の因子負荷量が高い項目を見ると、“無駄に休まず、できるだけその集団の活動に参加する”や“不必要に活動を休まないようにしている”が含まれており、これは先に述べた「誠実性」の概念と一致する。よって、因子 1 を「誠実性」とする。因子 2 の因子負荷量が高い項目は、“その集団の中の変化には遅れずについていくようにする”や“その集団の新しい展開や内部の事情に、遅れずについていくようにする”が含まれていた。これは「市民としての美德」と一致するため、因子 2 を「市民としての美德」と名付ける。因子 3 の因子負荷量が高い項目は、“その集団がやることのあらさがしをしないようにする”や“その集団のやり方や制度を変更することに対して不満を言わないようにする”であり、「スポーツマンシップ」に該当する内容であった。このことから、因子 3 を「スポーツマンシップ」とする。信頼性分析によるクロンバックの α 係数は、誠実性が 0.864、市民としての美德が 0.860、スポーツマンシップが 0.801 であった。

(3) サークル集団に対する満足度

横山 (2013) の成員満足度の 2 項目を使用し、「当てはまらない」～「当てはまる」の 5 点尺度で回答を求めた。天井効果により、全て除外されたため、本研究の分析では使用しない。

(4) 充実感

河村 (1999) などを参考にして作成された樋口 (2007) の大学に対する適応感のうち、本研究では、より大学生活への満足度を表している“大学での生活に不満はない”を大学生活への満足度と捉え、「当てはまらない」～「当てはまる」の 5 点尺度で回答を求めた。

(5) 組織風土

尾関・吉田 (2007) の 12 問から回答者の負担を減らすために、それぞれの因子で 4 項目になる

ように、因子負荷量が低いものから除き、8項目にし、サークル集団用に変更した。それぞれの項目において、「当てはまらない」～「当てはまる」の5点尺度で回答を求めた。

8項目で因子負荷量が0.400以下の項目が検出されなくなるまで因子分析を行った結果、4項目からなる因子1、2項目からなる因子2が抽出された。2つの因子は尾関・吉田(2007)と同様の構成であったため、因子1を「管理性」、因子2を「開放性」とした。信頼性分析によるクロンバックの α 係数は、「管理性」は0.862、「開放性」は0.654であった。

(6) コントロール変数

本研究では、コントロール変数として、サークル集団が運動系の回答者を1、それ以外のサークル集団(文化系・企画イベント系)の回答者を0とするダミー変数である「運動系ダミー」、サークル集団が公式な組織(大学側から部室や活動資金が与えられている)の回答者を1、サークル集団が非公式な組織(わからないも含む)の回答者を0とする「公式ダミー」、サークル集団の種類がサークルである回答者を1、それ以外のサークル集団(部活、同好会、委員会、就活支援団体、公式の学生団体)の回答者を0とする「サークルダミー」の3つを使用した。

V. 分析

本研究では、計133名のサンプルに対して、主要変数の天井効果・床効果を確認した。その結果、天井効果では12項目、床効果では11項目が検出された。よって天井効果・床効果が見られた計23項目を除外して使用している。

上記の使用変数には、同一のサンプルからすべての回答を得ていることによるコモンメソッド問題が生じている可能性を検討するため、Podsakoff & Organ(1986)が推奨するハーマンの単一因子テストを行った。使用したすべての尺度の項目を対象に、探索的因子分析(主因子法、回転なし)を行うことで、コモンメソッドによるバイアスの問題はないと判断する方法である。「固有値1以上の因子が2つ以上あり、第一因子の寄与率が50%を超えない」の2点を満たすことを確認した(因子数11、第一因子の寄与率11.995%)。

1. 相関分析

相関分析を行い、結果は図表3の通りである。サークル集団への態度の下位概念である集団への責務は、誠実性と市民としての美徳の間に1%水準で正の相関、大学生活への満足度との間に1%水準で正の相関が見られた。集団への妥協は、誠実性と市民としての美徳の間に1%水準で有意な正の相関が見られた。また集団での日和見は誠実性と市民としての美徳の間に1%水準で有意な負の相関が見られた。

サークル集団への態度の下位概念の集団への責務、集団への妥協と組織風土の下位概念である管理性は、1%水準で正の相関が見られた。集団での日和見と管理性は1%水準で負の相関があった。また集団への責務と組織風土の下位概念である開放性は、1%水準で正の相関が見られた。集団への妥協と開放性は、5%水準で負の相関がみられた。

図表 3 全体の相関分析

	平均値	標準偏差	Cronbachのα	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1 サークルダミー	0.797	0.404		1.000											
2 運動系ダミー	0.729	0.404		.029	1.000										
3 公式ダミー	0.617	0.404		-.321 **	-.098	1.000									
4 管理性	3.143	0.404	0.862	-.308 **	.010	.289 **	1.000								
5 開放性	3.940	0.404	0.654	-.161 *	.027	-.039	.279 **	1.000							
6 集団への責務	3.122	0.404	0.812	-.329 **	-.107	.195 *	.438 **	.252 **	1.000						
7 集団での日和見	2.872	0.404	0.811	.257 **	.153 *	-.326 **	-.314 **	-.122	-.572 **	1.000					
8 集団への妥協	2.556	0.404	0.864	-.068	-.177 *	.005	.252 **	-.209 *	.214 *	-.165 *	1.000				
9 誠実性	3.192	0.404	0.864	-.446 *	-.046	.356 **	.560 **	.236 **	.681 **	-.559 **	.247 **	1.000			
10 市民としての美徳	3.617	0.404	0.860	-.260 **	-.099	.109	.461 **	-.198 *	.547 **	-.317 **	.301 **	.664 **	1.000		
11 スポーツマンシップ	3.408	0.404	0.801	.039	-.108	-.087	.070	.040	.114	.119	-.009	.222 *	.410 **	1.000	
12 大学生生活の満足度	3.466	0.404		-.157 *	-.071	.097	.094	.203 *	.246 **	-.125	-.110	.185 *	.186 *	.112	1.000

** . 有意確率は 1%水準で有意

* . 有意確率は 5%水準で有意

+ . 有意確率は 10%水準で有意

2. サークル集団への態度が組織市民行動、大学生生活への満足度に与える影響

(1) 重回帰分析

サークル集団への態度が組織市民行動と大学生生活への満足度に与える影響を検討する。サークル集団への態度の下位概念 3 因子を独立変数、組織市民行動の下位概念 3 因子と大学生生活への満足度を従属変数とし、重回帰分析を行った (図表 4)。

図表 4 より、第 1 に、サークル集団への態度の下位概念である集団への妥協は、誠実性と市民としての美徳に正の影響を与えており、スポーツマンシップへの影響は見られなかった。このことから、【仮説 1-1 : 集団への妥協は、組織市民行動に負の影響を与える】は棄却された。また、集団での日和見は、誠実性には負の影響を与えているが、スポーツマンシップには正の影響を与え、市民としての美徳には影響を与えないことが明らかになった。これより、【仮説 1-2 : 集団での日和見は、組織市民行動に負の影響を与える】は一部棄却となった。

第 2 に、サークル集団への態度の肯定的態度には、集団への責務、集団への妥協が含まれる。集団への責務は、大学生生活への満足度に正の影響を与えているが、集団への妥協から大学生生活への満足度へは、負の影響が見られた。以上より、【仮説 2-1 : 集団への責務は、大学生生活に対する満足度に正の影響を与える】は支持され、【仮説 2-2 : 集団への妥協は、大学生生活に対する満足度に正の影響を与える】は棄却された。

第 3 に、仮説には含まれていないが、どのモデルでも、集団への責務が誠実性、市民としての美徳、スポーツマンシップに正の影響を与えていた。コントロール変数についての結果は以下の図表の通りである。

図表 4 サークル集団への態度が組織市民行動、大学生活への満足度に与える影響の重回帰分析

変数	Model1		Model2		Model3		Model4	
	誠実性		市民としての美德		スポーツマンシップ		大学生活への満足度	
	標準化係数	標準誤差	標準化係数	標準誤差	標準化係数	標準誤差	標準化係数	標準誤差
サークルダミー	-.191 **	0.168	-.095	0.176	.050	0.181	-.081	0.288
運動系ダミー	.073	0.142	-.014	0.148	-.132	0.148	-.076	0.242
公式ダミー	.149 *	0.139	-.015	0.145	-.053	0.149	.025	0.237
集団への責務	.464 **	0.079	.484 **	0.083	.290 **	0.097	.268 *	0.135
集団での日和見	-.188 *	0.079	.013	0.083	.267 *	0.086	.039	0.135
集団への妥協	.116 +	0.058	.190 *	0.061	-.046	0.063	-.180 *	0.099
定数	1.988 **	0.512	2.028 +	0.536	2.235 +	0.594	3.104 *	0.875
調整済みR2乗	0.565		0.311		0.043		0.059	
F値	29.547**		10.938+		1.980+		2.371*	

**．有意確率は1%水準で有意

*．有意確率は5%水準で有意

+．有意確率は10%水準で有意

3. 組織風土がサークル集団への態度に与える影響

(1) クラスタ分析

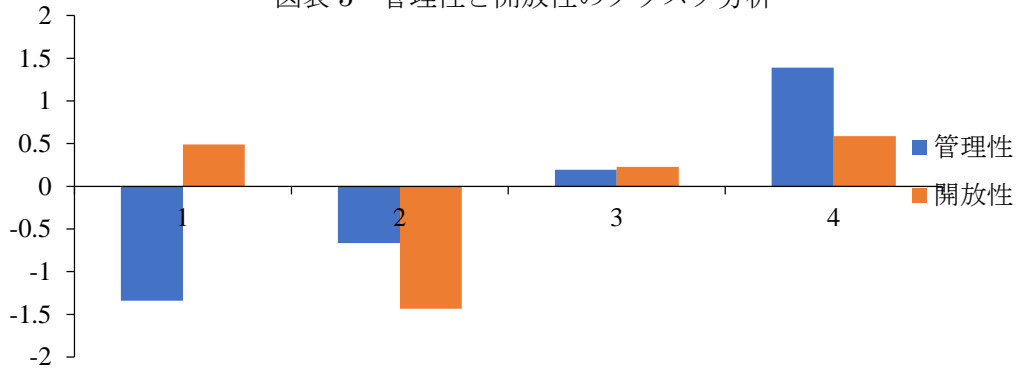
仮説 3 を検証するために、組織風土に関してクラスタ分析を行った（図表 5）。図表 5 の通り、4 つのクラスタに分かれた。クラスタ 1 の所属数は 23 で、標準化得点は管理性が-1.340、開放性が 0.491、クラスタ 2 の所属数は 28 で、標準化得点は管理性が-0.663、開放性が-1.433、クラスタ 3 の所属数は 54 で、標準化得点は管理性が 0.193、開放性が 0.229、クラスタ 4 の所属数は 28 で、標準化得点は管理性が 1.391、開放性が 0.589 であった。

(2) 分散分析

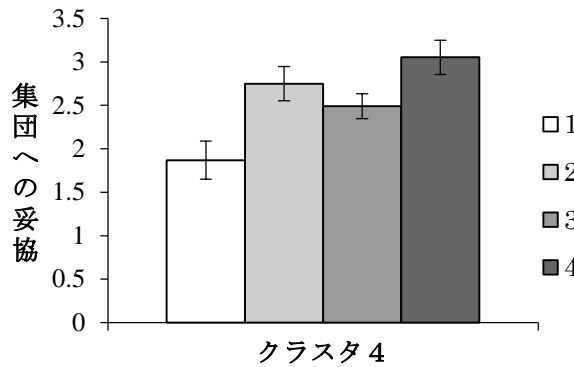
組織風土がサークル集団への態度に与える影響を検討する。組織風土を独立変数、サークル集団への態度の下位概念である集団への妥協を従属変数とし、分散分析を行った（図表 6）。

組織風土の主効果が 1%水準で有意となった（ $F(3,129)=5.799, p=0.01$ ）。多重比較（Holm 法）の結果、クラスタ 1 とクラスタ 2 の間に 5%水準、クラスタ 1 とクラスタ 4 の間に 1%水準で有意な差が確認された。しかし、管理性が高く、開放性が低い集団は確認されなかった。これより、【仮説 3：管理性が高く、開放性が低い集団では、集団への妥協が高くなる】は棄却された。

図表 5 管理性と開放性のクラスタ分析



図表 6 管理性開放性のクラスタと集団への妥協の分散分析



4. 追加分析

サークル集団への態度から組織市民行動、大学生生活の満足度への影響、また組織風土からサークル集団への態度への影響はこれまでの分析で確認した。しかしサークル集団への態度が、組織風土と組織市民行動、大学生生活の満足度を媒介し影響を与えるというモデルは検討していない。そこでサークル集団への態度が組織風土と組織市民行動、大学生生活への満足度を媒介するモデルを検討するため、媒介分析を行う。

組織風土がサークル集団への態度を媒介し、組織市民行動もしくは大学生生活の満足度に影響を与えるかどうかを、媒介分析を使用し検証する。媒介分析を行う前に、①組織風土からサークル集団への態度への影響、②組織風土から組織市民行動、大学生生活の満足度への影響、③サークル集団への態度から組織市民行動、大学生生活の満足度への影響、④組織風土、サークル集団への態度から組織市民行動、大学生生活の満足度へ影響があるかを確かめる必要がある。そのため、4つのパターンについて重回帰分析を行った（図表 7）。

図表 7 より、影響が見られたのは、①管理性が集団への責務を媒介し、誠実性に影響を与えるパターン、②管理性が集団への責務を媒介し、市民としての美德に影響を与えるパターン、③管理性が集団での日和見を媒介し、誠実性に影響を与えるパターン、④管理性が集団への妥協を媒介し、市民としての美德に影響を与えるパターンの 4 つであった。よって、この 4 つで媒介分析を行った。その結果を図表 8 に示す。図表 8 より、パターン①は、管理性は誠実性に正の影響を与えていたが、集団への責務を媒介変数に追加した結果、集団への責務は誠実性に正の影響を与えながらも、一方で管理性の効果は小さくなった。間接効果の検定（Bootstrap 法, N=2000）の結果、95%信頼区間

（[0.144,0.331]）に 0 を含んでおらず、集団への責務の有意な媒介効果が認められた。

パターン②は、管理性は市民としての美德に正の影響を与えていたが、集団への責務を媒介変数に追加した結果、集団への責務は市民としての美德に正の影響を与えながらも、一方で管理性の効果は小さくなった。間接効果の検定 (Bootstrap 法, N=2000 回) の結果、95%信頼区間 ([0.085,0.249]) に 0 を含んでおらず、集団への責務の有意な媒介効果が認められた。

パターン③は、管理性は誠実性に正の影響を与えていたが、集団での日和見を媒介変数に追加した結果、集団での日和見は誠実性に負の影響を与えながらも、一方で管理性の効果は小さくなった。間接効果の検定 (Bootstrap 法, N=2000) の結果、95%信頼区間 ([0.049,0.244]) に 0 を含んでおらず、集団での日和見の有意な媒介効果が認められた。

パターン④は、管理性は市民としての美德に正の影響を与えていたが、集団への妥協を媒介変数に追加した結果、集団への妥協は市民としての美德に正の影響を与えながらも、一方で管理性の効果は小さくなった。間接効果の検定 (Bootstrap 法, N=2000 回) の結果、95%信頼区間 ([0.003,0.112]) に 0 を含んでおらず、集団への妥協の有意な媒介効果が認められた。以上より、4つのパターンともに媒介効果が見られた。

図表 7 媒介分析のための重回帰分析

① 組織風土からサークル集団への態度

変数	Model5		Model6		Model7	
	集団への責務		集団での日和見		集団への妥協	
	標準化係数	標準誤差	標準化係数	標準誤差	標準化係数	標準誤差
サークルダミー	-0.191 *	0.205	.110	0.214	-.047	0.238
運動系ダミー	-.105	0.170	.132	0.178	-.185 *	0.198
公式ダミー	.032	0.170	-.222 *	0.178	-.148 +	0.197
管理性	.334 **	0.076	-.201 *	0.080	.372 **	0.089
開放性	.132	0.096	-.061	0.101	-.321 **	0.112
定数	2.067 **	0.498	3.572 **	0.521	3.710 **	0.579
調整済みR2乗	0.231		0.160		0.165	
F値	8.917**		6.014**		6.206**	

**．有意確率は1%水準で有意

*．有意確率は5%水準で有意

+．有意確率は10%水準で有意

②組織風土から組織市民行動、大学への満足度

変数	Model8		Model9		Model10		Model11	
	誠実性		市民としての美徳		スポーツマンシップ		大学生活への満足度	
	標準化係数	標準誤差	標準化係数	標準誤差	標準化係数	標準誤差	標準化係数	標準誤差
サークルダミー	-.254 **	0.196	-.138	0.187	.043	0.199	-.105	0.290
運動系ダミー	-.030	0.163	-.107	0.155	-.122	0.165	-.067	0.241
公式ダミー	.156 *	0.163	-.066	0.155	-.118	0.165	.067	0.241
管理性	.413 **	0.073	.422 **	0.070	.115	0.074	-.011	0.108
開放性	.086	0.092	.058	0.088	.013	0.093	.193 *	0.136
定数	1.870 **	0.478	2.773 **	0.455	3.303	0.483	2.651	0.706
調整済みR2乗	0.399		0.215		-0.004		0.029	
F値	18.507**		8.250**		0.882		1.795	

** . 有意確率は1%水準で有意

* . 有意確率は5%水準で有意

+ . 有意確率は10%水準で有意

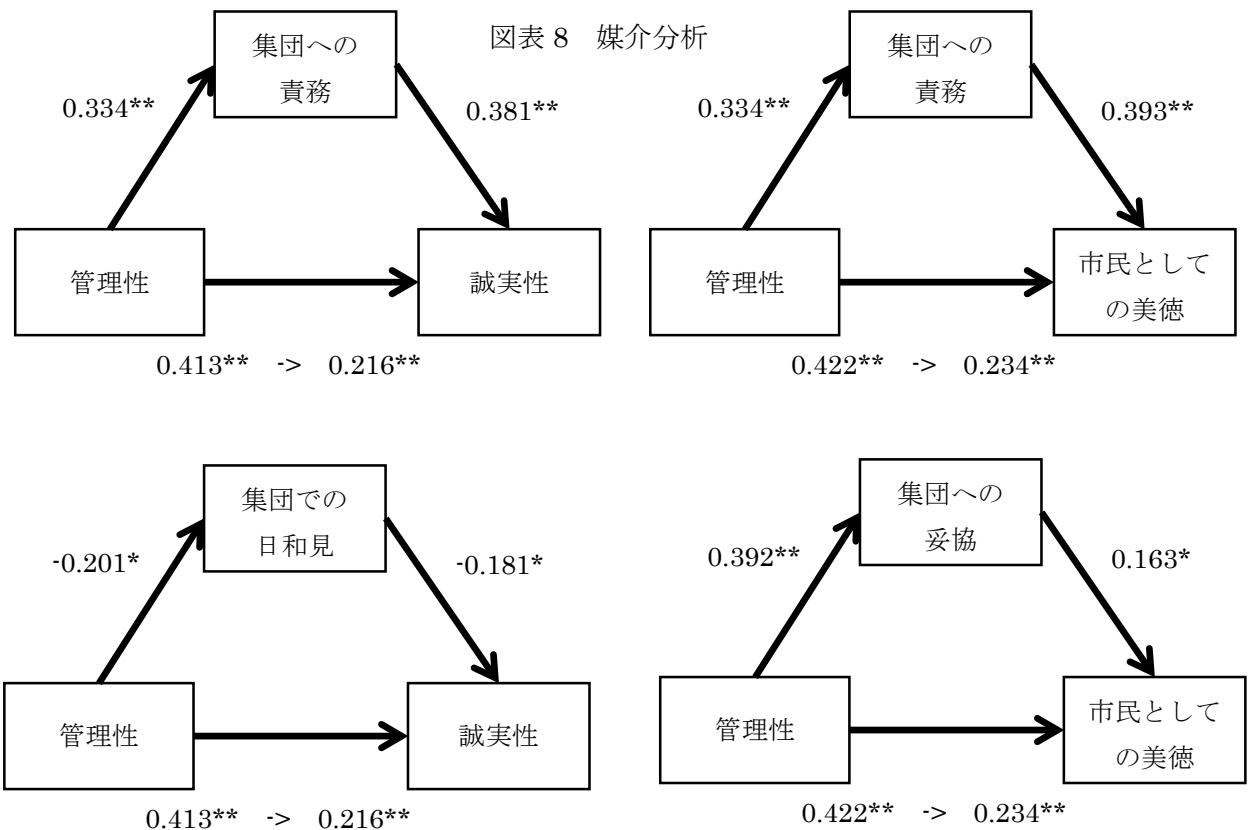
③組織風土、サークル集団への態度から組織市民行動、大学への満足度

変数	Model12		Model13		Model14		Model15	
	誠実性		市民としての美徳		スポーツマンシップ		大学生活への満足度	
	標準化係数	標準誤差	標準化係数	標準誤差	標準化係数	標準誤差	標準化係数	標準誤差
サークルダミー	-.157 *	0.163	-.058	0.173	.060	0.199	-.070	0.292
運動系ダミー	.050	0.137	-.038	0.145	-.144	0.166	-.072	0.245
公式ダミー	.117 +	0.138	-.050	0.147	-.077	0.168	.047	0.247
管理性	.216 **	0.066	.234 **	0.070	.109	0.080	-.032	0.118
開放性	.054	0.081	.060	0.086	-.029	0.098	.118	0.144
集団への責務	.381 **	0.080	.393 **	0.085	.264 *	0.097	.244 *	0.143
集団での日和見	-.181 *	0.076	.020	0.081	.270 *	0.092	.040	0.136
集団への妥協	.090	0.061	.163 *	0.064	-.075	0.074	-.141	0.108
定数	1.393 **	0.585	1.485 **	0.620	2.235	0.711	2.425 +	1.046
調整済みR2乗	0.601		0.351		0.035		0.055	
F値	25.871**		9.937**		1.606		1.960+	

** . 有意確率は1%水準で有意

* . 有意確率は5%水準で有意

+ . 有意確率は10%水準で有意



**．有意確率は1%水準で有意
 *．有意確率は5%水準で有意
 †．有意確率は10%水準で有意

VI. 考察

前章の分析結果を受けて、再度仮説および追加分析について検討する。モデル 1~11 より図を作成した (図表 9)。

1. サークル集団への態度が組織市民行動に与える影響

【仮説 1-1 : 集団への妥協は、組織市民行動に負の影響を与える】

集団への妥協は誠実性と市民としての美徳に正の影響を与え、スポーツマンシップには影響を与えていなかった。これより、仮説 1-1 は棄却された。

市民としての美徳とは、集団のことを気にしているか否か、という内容であった。集団への妥協は、肯定的態度の下位概念であり、サークル集団に対し、好意的なイメージをもっていると考えられる。このことから、集団への妥協という態度を示している人も、サークル集団を高く評価しているため、負の影響ではなく、正の影響を与えていると考えられる。

誠実性とは、休憩などに関する任意の行動である。上記と同様に、集団への妥協が組織を阻害するような態度ではないため、基本的な休憩に関する行動は行っていると考えられる。従って、誠実性に正の影響を与えたと考察できる。

集団への妥協とは、集団への不満を我慢するものであるが、今回残った項目は、“その集団を誰か

が変えることを期待している”と“その集団を他の人に変えてほしいと思う”の2項目であった。またスポーツマンシップとは、“その集団のやり方や制度を変更することに対して不満を言わないようにする”といった、不満を我慢するような質問が含まれていた。このことから、高田・松井（2017）における集団への妥協とは異なり、不満を抱いている状態ではあるが、期待している状態を示す変数である。従って、集団への妥協とは期待を表し、スポーツマンシップとは我慢を表しており、期待と我慢という異なる状態であるため、影響がなかったと考えられる。

【仮説 1-2：集団での日和見は、組織市民行動に負の影響を与える】

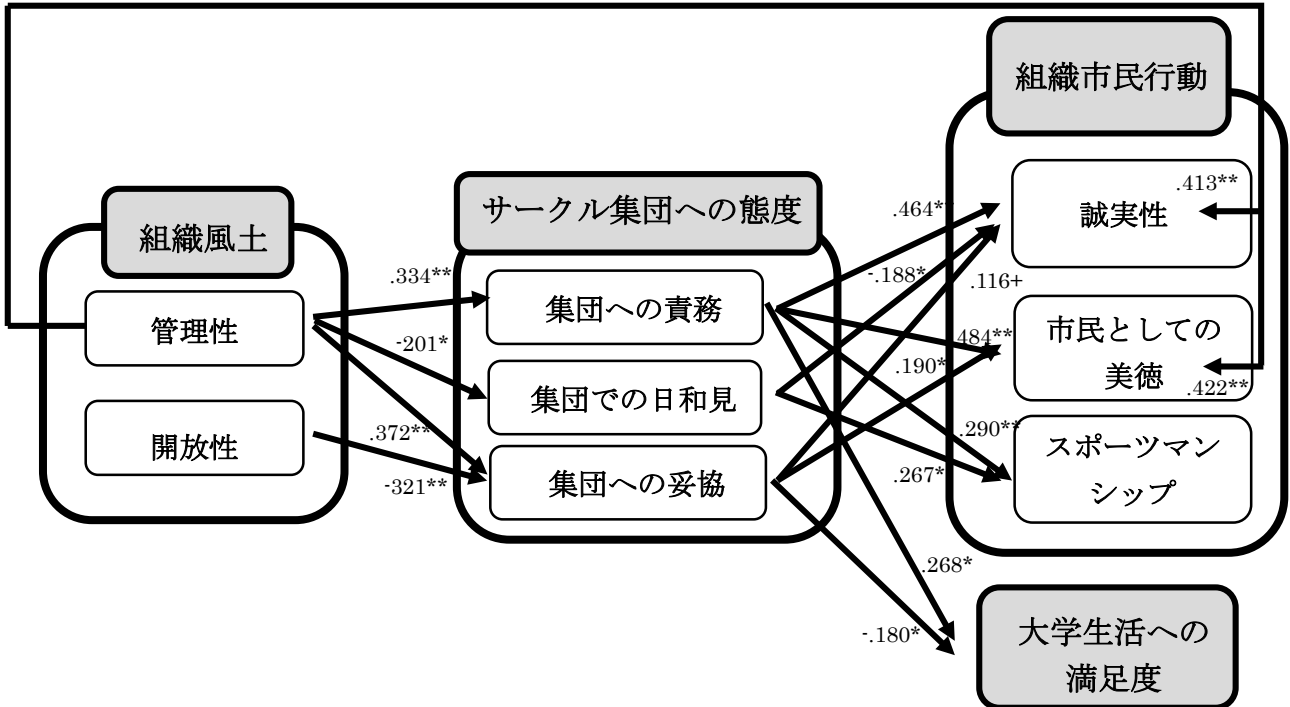
集団での日和見は誠実性には負の影響を与えているが、スポーツマンシップには正の影響を、また市民としての美德に影響を与えなかったことが明らかになった。これより、仮説 1-2 は一部棄却となった。

集団での日和見は、集団への関心が低いため、自発的な行動をすることが少ない。このことから、休憩などに関する任意の行動を表す誠実性には、負の影響を与えたと考えられる。

スポーツマンシップは、不満を我慢するような行動であり、集団での日和見の態度を抱いている人は、まず不満を抱くことが少なく、不満を抱いても頑張る必要がないと思っているので、やり過ぎしてしまうと考えられる。従って、集団での日和見は、スポーツマンシップに正の影響を与えたと考察できる。

市民としての美德とは、集団の動きについていくという質問と、集団のメンバーを助けるという質問が含まれている。このことから、集団での日和見の態度の人は集団に対して、無関心であるが、メンバーに対しても無関心であるかは別であると考えられる。このことにより、集団での日和見から市民としての美德への影響が、様々になったことで有意な結果が得られなかった可能性が考えられる。

図表 9 組織風土からサークル集団への態度への影響、サークル集団への態度から組織市民行動、大学生活の満足度への影響、組織風土から組織市民行動、大学生活の満足度への影響の結果



**．有意確率は 1%水準で有意
 *．有意確率は 5%水準で有意
 +．有意確率は 10%水準で有意

2. サークル集団への態度が大学生活への満足度に与える影響

【仮説 2-1：集団への責務は、大学生活への満足度に正の影響を与える】

集団への責務は、大学生活への満足度に正の影響を与えることが明らかになったため、仮説 2-1 は支持された。集団への責務はサークル集団をより発展させようとしている態度を抱いている状態なので、大学生活を不満に感じるものが少なく、充実した生活を送っていることが考えられる。

【仮説 2-2：集団への妥協は、大学生活に対する満足度に正の影響を与える】

集団への妥協から大学生活への満足度へは負の影響が見られたため、仮説 2-2 は棄却された。集団への妥協は、仮説 1-1 でも述べたようにサークルに対して好意的なイメージを持っているが、不満を抱いている状態でもあり、この不満が大学生活に対する満足度に影響を与えたと考えられる。高田・松井（2012）では、サークル集団に不満を抱かず、サークル集団に積極的に関わることによって、大学生活の満足感や自己への評価が向上していたと明らかにされている。このことから、サークル集団に所属している大学生は、サークル集団に対する不満がそのまま大学生活全体にも影響を与えたと考えられる。

3. 組織風土がサークル集団への態度に与える影響

【仮説 3：管理性が高く、開放性が低い集団は、集団への妥協が高くなる】

管理性と開放性でクラスタ分析を行ったが、管理性が高く、開放性が低い集団は確認されなかった。よって仮説 3 は棄却された。管理性が高く、開放性が低い集団とは、規範に基づいて管理されており、自由に発言できない集団であるといえる。サークル集団は、基本的に活動が自由な集団であるため、その自由が制限されすぎている集団は少ないと考えられる。そのため、管理性が高く、開放性が低いクラスタは抽出されなかったと考察できる。クラスタとして、管理性が高く、開放性が低い集団が抽出されていれば、管理性は集団への妥協へ正の影響、開放性は負の影響を与えていることから、この集団の集団への妥協は高いと考えられる。

4. 媒介分析

追加分析で媒介分析を行った。その結果、管理性と組織市民行動の間には、集団への責務、集団での日和見、また集団への妥協が媒介することが確認された。このことから、管理性が高い集団では、集団への責務や集団への妥協が媒介することによって、組織市民行動に影響を与えることが明らかになった。橋本他（2010）では、サークル集団の持つフォーマル性の程度が、部員の所属サークルに対する愛着や責任感、メンバーシップの規定要因になることを明らかにしている。また、新井（2004）によると、フォーマル性とは、「当該集団において役割や地位構造、職務、規則などが明確で、これらによって成員の行動が規制されている度合い」とされていることから、組織風土の管理性と近い概念であるといえる。このことから管理性の高い集団では、部員は愛着や責任感を抱くことで、サークル集団に対して肯定的態度を持ち、組織市民行動を行うと考えられる。

5. 天井効果・床効果について

回答の結果、サークル集団への態度は天井効果・床効果により除外された項目が多く、概念としては、6 つのうち、3 つしか抽出することが出来なかった。これは、サークル集団の特性によるものであると考えられる。サークル集団とは、趣味やスポーツを行うという、個人的な目的に基づいて活動がなされ、その行動が比較的自由である集団のことを指している。また、大学生はサークルに対して成員とのつながりや自由な雰囲気を求めている。このことから、集団への愛着を示す集団への親近を抽出することが出来なかったと考えられる。集団への反抗、集団からの離脱が抽出できなかった理由は、サンプルにはサークル集団に所属している人の割合が多かったことが挙げられる。サークル集団は、退団することは個人の自由である。このことから、集団への反抗や集団からの離脱のような態度を表している人は、サークル集団を退団しており、抽出されなかったと考えられる。

Ⅶ. インプリケーション

1. 学術的インプリケーション

本研究の学術的インプリケーションとして、3 点あげる。

第 1 に、サークル集団に関する研究において、否定的態度を含めたサークル集団への態度が与える影響について検討した点である。既存研究では、組織コミットメントなどサークル集団に対する肯定的態度に関する研究がほとんどであったが、集団での日和見という否定的態度が組織市民行動の下位概念である誠実性に負、スポーツマンシップに正の影響を与えることが明らかにされた。

第 2 に、サークル集団への態度を表す尺度の有用性を示した点についてである。本研究において、

高田・松井(2017)が、改訂した尺度を用いて、研究を行った。その結果、組織市民行動や大学生活の満足度に影響を与えることが明らかになった。このことから、サークル集団に対する態度の尺度の有用性は示されたと考えられる。

第3に、サークル集団への態度の規定要因についてである。サークル集団への態度の肯定的態度は、組織風土の中の管理性と開放性によって、生み出されることが明らかになった。高田(2014)では、サークル集団への態度の肯定的態度の規定要因は、集団フォーマル性であったが、新たに発見されたため、肯定的態度の研究に寄与できた。

2. 実務的インプリケーション

実務的インプリケーションとして、メンバーに自発的な行動、つまり組織市民行動を行うってもらうには、組織風土の管理性を高め、集団への責務を持ってもらうことが重要だと明らかになった。サークル集団とは自由な集団ではあるが、自発的に動いてもらうような組織にするには、管理性を高め、集団に対する肯定的態度を持ってもらうことが、大切である。組織の管理性を向上させるには、メンバーに仕事を任せること、また上級生が下級生に注意を頻繁にすることが挙げられる。

Ⅷ. 研究の限界と今後の課題

本研究では、否定的態度も含めたサークル集団への態度を検討するために、サークル集団を対象に調査をしたが、否定的態度の下位概念である3つの内、1つしか抽出することが出来なかった。これは回答者の属性として、現在所属している人や引退した人が多く、自らサークル集団を離脱した人の数が少なかったことが挙げられる。否定的態度には、集団からの離脱という概念が含まれており、サークル集団を離脱した人が少なかったことにより、この概念を抽出することが出来なかったと考えられる。また、サークル集団への満足度に関する項目は、天井効果で除外されており、このことからサークル集団に否定的な態度を抱いている回答者が少なかったことが予想される。サークル集団へ否定的態度を抱いている人が、組織にとってどのような影響を及ぼすのかが明らかとするために、まずはサークル集団に否定的な態度を抱いている回答者を増やす必要がある。そうすることで、否定的態度に関する研究は発展していくだろう。

Ⅸ. 参考文献

- Organ, D.W. (1988) *Organizational citizenship behavior: The good soldier syndrome*. Lexington Books.
- Podsakoff, P.M., & Organ, D.W. (1986) "Self reports in Organizational Research :Problems and Prospects." *Journal of Manegement*, Vol.17, pp.531-544.
- 新井 洋輔・松井 豊 (2003) 「大学生の部活動・サークル集団に関する研究動向」『筑波大学心理学研究』 No.26, pp.95-105.
- 新井 洋輔 (2004) 「サークル集団における対先輩行動：集団フォーマル性の概念を中心に」『社会心理学研究』 No.20, pp.35-47.
- 梅澤 正 (1986) 「組織開発の課題」 三隅 二不二編 『組織の行動科学』 福村出版, pp.275-293.
- 尾関 美喜・吉田 俊和 (2007) 「集団内における迷惑行為の生起及び認知—組織風土・集団アイデンティティによる検討—」『実験社会心理学研究』 Vol.47, No.1, pp.26-38.
- 河村 茂雄 (1999) 「生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発—学校生活満足度尺度（高校生用）の

- 作成]『岩手大学教育学研究年報』 Vol.59, No.1, pp.111-120.
- 迫 俊道・荒井 貞光 (2002) 「大学生のクラブ・サークル活動に関する研究」『広島体育学研究』No.28, pp.11-20.
- 潮村 公弘・松岡 瑞希 (2005) 「組織市民行動を規定する集団的アイデンティティ要因と動機要因の探求：職場集団と大学生集団との比較から」『人文科学論集 人間情報学科編』 Vol.39, pp.27-47.
- 全国大学生生活協同組合連合 (2013) 「第 48 回学生の消費生活に関する実態調査報告書 CAMPUS LIFE DATA 2012」, 全国大学生生活協同組合連合会.
- 高木 浩人 (2006) 「大学生の組織帰属意識と充実感の関係」『愛知学院大学心身科学部紀要』 No.3, pp.61-67.
- 高木 浩人 (2007) 「大学生の組織帰属意識と充実感の関係(2)ー組織による差異の検討ー」『愛知学院大学心身科学部紀要』 No.3, pp.47-54.
- 高田 治樹・松井 豊 (2012) 「大学生のサークル集団に関する研究動向ー新井・松井(2003)からの研究動向の変化ー」『筑波大学心理学研究』 No.43, pp.25-35.
- 高田 治樹 (2014) 「大学生サークル集団への態度の探索的検討ー否定的態度を含めた態度パターンの分類ー」『青年心理学研究』 No.26, pp.29-46.
- 高田 治樹・松井 豊 (2017) 「大学生サークル集団への態度尺度の改訂および尺度構造の検討」『筑波大学心理学研究』 No.54, pp.51-62.
- 田中 堅一郎 (2001) 「組織市民行動ー測定尺度と類似概念, 関連概念, および規定要因についてー」『経営行動科学』 Vol.15, No.1, pp.1-28.
- 西田 豊昭 (1997) 「企業における組織市民行動に関する研究ー企業内における自主的な行動の原因とその動機ー」『経営行動科学』 Vol.11, No.2, pp.101-122.
- 橋本 剛明・唐沢 かおり・磯崎 三喜年 (2010) 「大学生サークル集団におけるコミットメント・モデルー準組織集団の観点からの検討ー」『実験社会心理学研究』 No.50, pp.76-88.
- 樋口 康彦 (2007) 「大学生の適応に影響を与える要因に関する考察ーソーシャルスキル, 交友関係などの観点からー」『国際教養学部紀要』 Vol.3, pp.97-102.
- 広田 君美 (1963) 『集団の心理学』 誠信書房.
- 松山 一紀 (2010) 「非正規労働者の職務態度とメンタルヘルス」『経営行動科学』 Vol.2, No.23, pp.107-121.
- 横山 孝行 (2013) 「大学におけるクラブ・サークルリーダーの類型化の試み」『東京工芸大学工学部紀要』 Vol.36, No.2, pp.9-15.